《松の木の間を》

地も海も、いずれも生きもののように変化し続けるものであり、これらが睦み合う海岸線もまた、時とともに絶えず動き、踊り続ける。本インスタレーションの設置場所（旧箱崎キャンパス内、九州大学総合研究博物館）周辺における発掘調査によれば、1270年代、モンゴル軍の侵攻から九州を守る目的で海岸沿いに築かれたいわゆる元寇防塁がこの付近に廻らされていたことが明らかになっている。中世の碇石も発掘されているが、これらはいずれも当時この地域がまさに海沿いであったことの物証といえよう。1911年設立の九州帝国大学建設が始まった段階では、海岸線はここから約700mの地点まで伸びていたことが地形図から確認される。今日では埋め立て工事の結果、海岸は2kmも離れた場所にある。

九州大学は創立当初から大日本帝国の学術・科学・医療部門の一翼を担い、広範な植民地支配や帝国主義的過ちに関与した。しかしこの地においてもまた争いの歴史がある。既述の通り、13世紀にここは外国の侵略に対する防衛拠点であったし、太平洋戦争中には帝国軍による埋め立ても行われた。大学校舎の建設に当たっては地元農民・漁民からの強い反対を受けているが、帝国政府とは結局合意に至らなかったため、最終的に土地は収用された。人間の営み自体もまた、地そのものと対立する。かつてこの地に豊かに生い茂っていた松の木には最良の砂地も、土壌そのものとしてみれば不安定であるから、大規模な建物を建てるのには適していない。

6チャンネルのサウンド・インスタレーション《松の木の間（ま）を》は、それぞれ独自の特徴を負わせた3ゾーンに分かれている。東側の「海洋ゾーン」（庭園の石を蛇行する川に見立てることで、このゾーンを川が流れ込む海と捉える）は、この地域が海であった遥か昔を想起させる。その水は今や地下に封じられ、海そのものは2キロも離れた場所にある。このゾーンには、箱崎キャンパスから最も近く、博多湾にアクセスできる地点で録音された音と、博物館地下からの音が含まれている。これは本インスタレーション中、最も低く、最も古く、最も深い層である。

西側の「上流ゾーン」は空・天、そしてかつてこの地に青く色を湛えていた木々（松、その他の樹々）の記憶である。ここから西へ300m、現在建設現場となっている場所には数本の古い松が残っている。ここは大学建設計画が練られていた当時、海岸線に広がっていた「地蔵松原」と呼ばれる松林の端に位置していた。本ゾーンの録音は、散在する名残の松林で聴かれる夜明け鳥の囀りと、博物館最上階で収録された音で構成されている。たとえ数が少なくてもこれらの樹木が生き残っていること————彼らはその同胞のほとんどを伐り倒した大学校舎よりも長生している————は希望であり、ことによるといつかここにも再び松林が拡がるかもしれない。これが本インスタレーションの最上層、未来に向けた層である。

中世日本の美学的宇宙観（例えば能楽論に典型的なもの）において、海と天という二要素からなる三部構成は、当然ながら第三の要素である地によって補完される。しかし本インスタレーションにおいては、低と高の間、これら三つの要素が自然に織りなす関係の中に人間の近代性が割り込んでくる。この特定の場所においてそれは帝国大学という形をとった。頭上を飛び交う航空機の予測不可能な轟音と共に、中央（下流）ゾーンは東側の上流ゾーンと西側の海洋ゾーン間における音響エネルギーの流れを遮断する、一種のインピーダンス、すなわちダムの役割を果たしている。その音響素材は、プラスチック製のLPレコードの登場以前の19世紀から1950年代まで使われていたシェラック製レコードから採られた。これらは、九州大学博物館が所蔵するSPレコードを、博物館の歴史的なSPレコードプレーヤーで再生したものである。

詩人・若山牧水（1885–1928）は、九州大学が基本的に医学部のみで構成されていた1913年の少し前、大学と箱崎の海岸線を訪れている。訪問中に詠んだ一つの詩が本インスタレーションの三ゾーンを反映している：

松原は海にかも似むそのかげの医科大学の赤き煙突

しかし本作品のタイトルはまた別の詩人である長塚節（たかし）（1879–1915）の歌に由来する。結核を患っていた彼は最期の1年を大学病院や近隣の旅館で過ごし、小康と悪化を繰り返しながらも遂にその病に斃れた。その彼にとって松林の中を歩くことは心と身体を癒やし、安らぎを得、希望をもたらすものであったようだ。